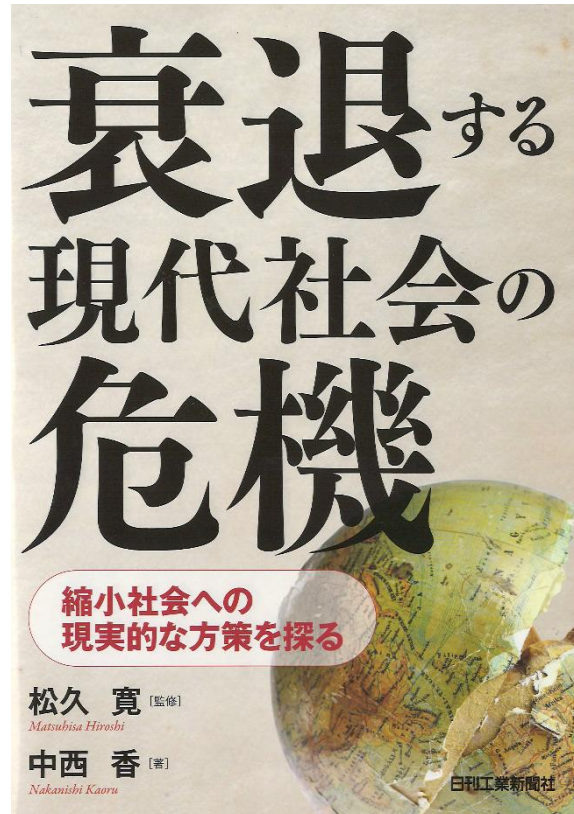


中西香著「衰退する現代社会の危機」（日刊工業新聞社）

前書き（要点）

人類の近代・現代の歴史の扉は 18 世紀の産業革命によって開かれた。それ以来 3 世紀約 300 年間たった現在、工業文明は最高度に発達をとげ、これを支える社会もどんどん変化し今や大量生産・大量消費型のグローバル世界が出来上がっている。特に 20 世紀後半以降の世界経済は史上最高の年率 5% を超える経済成長を記録し拡大に継ぐ拡大を続けていた。しかしこうした拡大の 20 世紀は 21 世紀初頭には限界に達し、停滞が世界を覆っている。温暖化をはじめとする環境危機、2008 年の先進国発の金融危機、そして 2011 年東日本災害・福島原発事故などである。特に福島原発事故は最高度に発達した人類の科学技術への人々の限らない信頼を大きく揺るがした。これらの深刻な事態は、現代社会が従来の拡大・発展一本槍だけではうまく行かず、何らかの曲がり角に来たことを物語っているとみえる。



本書ではそうした観点から、衰退する現代社会の危機を次の順に説明している。

第 1 章～2 章では、世界的な衰退傾向と近代以来 300 年間に渡って発展の先頭を切ってきた先進国の経済的停滞・減少やその構造的要因を分析している。

第 3 章では、1990 年以降の日本の経済停滞、膨大な借金、人口減少などの「望まざる縮小」実態と 21 世紀の悲観的将来について述べている。

第 4～5 章では、エネルギーや環境の 21 世紀の見通しをシミュレーションで明らかにしている。これまでの成長路線を歩むと 21 世紀後半には確実に破綻に追い込まれる事になる。

第 6 章では、科学技術の最先端といわれる核による支配や原発事故だけでなく弱肉強食の強まりが 21 世紀には数々のカタストロフィー（破局的な大災害）をも引き寄せることを警告している。

第 7～8 章では、21 世紀には超国家企業による世界の産業覇権・支配が進むことを警告している。

第 9 章では、世界の政治の底流での変化を各大陸ごとに詳しく説明している。

第 10 章では、危機への対処の道としての縮小社会の必然性や幸せな縮小社会試論を展開している。

今や人類はパラダイム転換を迫られている中で、ドイツの行き方は示唆に満ちている。ドイツの人々は福島原発事故を機に脱原発の決断をすると同時に国全体の電力消費量を 2050 年までに 25%削減し CO2 を 95%減らすことを目指して進みだした。これはまさに国家レベルで縮小社会を目指していこうとする試みに他ならない。そればかりではない。いわば助け合いによってもっと多くの人々が幸せを共有し善意と希望に満ち溢れた社会を再構築しようとしている面こそが注目に値するのだ。これこそ縮小社会という新しい社会の建設に他ならない。今進行している成長の破綻がもたらす社会は人々に貧困・苦しみを強いるむごいものである。しかし、ドイツのように決断すれば、カネ中心の弱肉強食の社会におさらばをして、人々が仲良く分け合い、助け合い、自然との共存の方向に社会の仕組みを切り替えるきっかけを作ることができる。縮小社会は①持続可能で豊かな縮小社会、②弱肉強食の無い人間尊重社会、③自由闊達な社会連帯のコミュニティが基本、④自然との共生・循環社会、の 4 つの基本的特徴を持つ。また縮小社会は古くからある助け合いの知恵・仕組みを生かすと同時に、グローバルな民主主義の発展を目指す。

第 11 章ではグリーン星という架空の縮小社会を訪問した体験談を載せ縮小社会が具体的にどうなのかの一例を紹介している。本来の縮小社会とはここで展開されているように互いの喜び・創意・知恵に基づいた各種のコミュニティを基本とする幸せな社会である。

このような人類の知恵と工夫に満ちた縮小社会こそが 21 世紀を「破局の世紀」から「サバイバルの幸せな世紀」に転換していく真の力となるのではないだろうか。